



話の坑口

上野英信集

1

上野英信集
話の坑口

一九八五年二月二十五日発行
定価 二、六〇〇円

著者 上野英信

発行者 原田奈翁雄

発行所 径書房

東京都千代田区三崎町二一三―五
電話 〇三―二三四―四六〇八(編集)
〇三―二六三―一七〇一九(営業)
振替口座 東京一―三二七二六

印刷 明和印刷

京美印刷

製本 綴積信堂

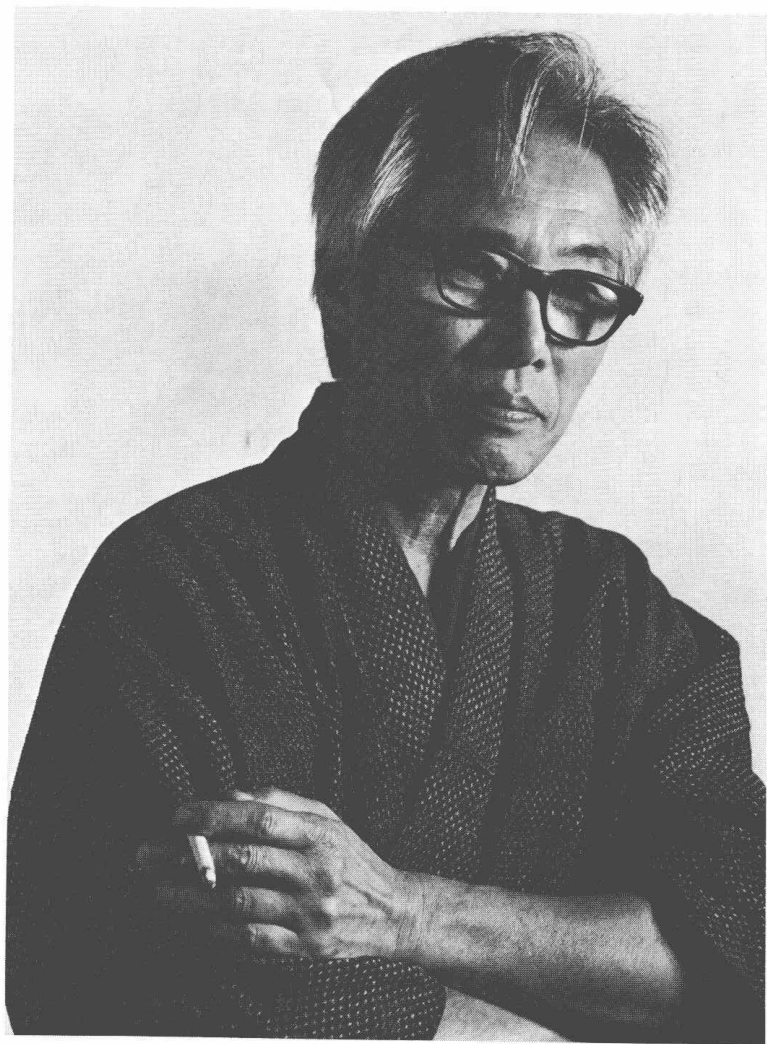
上野英信集

2

奈落の星雲

径書房

カバー絵・装幀 富山妙子



1983年10月25日 筑豊文庫で筆者 撮影／江成常夫

話の 坑口

上野英信集① 話の坑口／目次

せんぷりせんじが笑った！
9

はじめての発言
25

みんなで書いたラクガキ
37

親と子の夜
51

ひとくわぼり
71

あひるのうた
191

黒い朝
227

ぼた山と陥落と雷魚と
239

伝八がバケモノを見た話
253

大回転
269

あとがき 私と炭鉱との出会い
289

解説／闇に燃える命の火の文学 川原一之
300

初出一覧
312

■版画／千田梅二

せんぷりせんじが笑った！



背振千次（せぶりせんじ）の無口で無愛想なことときたらまったく有名なもんだ。職場の仲間たちは誰ひとりほんとの名まえをよぶものはおらん。みんな「せんぶりせんじ」とよんでいる。それというのも千次が、年がら年じゅう、ろくすっぽ口もきかず笑顔ひとつみせず、まるでせんぷりを煎じてのんだような、にがりきったつらをしていやがるからのことさ。

せんぶりせんじのやつを笑わせきいたら一升おごろうと皆がカケの相談をはじめた時、先山さきやまの源助じいはこう言ったもんだ。「骨おり損のくたぶれもうけだわい。なんか親の遺言でもあるにちがわん。やつの笑顔をみようなんち、坑内でお天道さんをおがもうちゅうげなもんだわい。頭のとっぺんから屁でもひってみせんことにや」みんな大笑いをしてカケのはなしは屁のようにふっとんで消えてしまった。



「あんた、弁当」「……」「はい、水筒、それから、はい、手拭」「……」「もう忘れものはないわね？」中風でねこんだままの母親も、ふとんの中から、まわらない舌で「お守り^{まも}はもつちよらない？」しかし千次は一言もこたえないで地下たびをはき、脚絆^{くわはん}をつけてたちあがった。「じゃ、父ちゃん御安全に！」女房の静恵は、うまれて百日ばかりになる一粒だねの正坊をだいて、挨拶をさせるように体をかたむけた。むつとした顔つきで父親の顔をみている子供の頬を、千次は指でつつきながら、やっと口をきいた。「この坊主いつまでたっても愛想もくでもないな」「あんたに似たのよ」と女房はこたえた。「でも私が笑わせるとよく笑うわ。それに第一あんたがそんなむつかしい顔をして、この子に笑えなんて無理だわ。笑ってみせなきゃ」「おかしくもないのに笑えるかい」千次は重い足どりで出かけていった。入坑をつげる十時のサイレンが夜空にうなる。病床で手をあわせて母親は神棚に祈った。「どうぞ千次が今日もケガのありませんごと。孫が息子のげなへんくつもんにならんと笑顔のええ子になりますごと……」



まったく面白くもない世のなかだよ。笑うどころか泣くのをこらえるのがやつとの仕事だ。「くそつ、またノミがつまりやがった」孔をくついていた副先の五郎ちゃんがドリルを拳でたたきつけてどなる。「ちくしよ、まるで泥鰌すくいだ」膝までつかる泥水のなかで硬をさらえながら後山の昭やんがこぼす。「どけ! あぶないど」先山の源じいがツルをあてたかと思うと、畳一枚ほどの硬がどどッとおちてくだけとぶ。天井のさけめから滝のように地下水がふる。水をふきあげながら大きな音をたててメタンガスがふきでる。天井はあとからあとからぬけおちる。あぶなくて仕事ができないから掘進を中止してくれと要求しても、せめて排水溝をさきに掘ってからにしてくれと頼んでも、会社のやつは、断層のむこうの炭座を一日もはやくつかまねばならんからといって、てんで受けつけてくれない。

けが人はふえる。能率はさがる。賃金はさがる。「くっそ」「くっそ」「くっそ」みんな歯をくいしばって地獄のような地底の職場で今日も働きはじめた。せんぷりを一升ものんだような顔で千次も、硬をつみ、函をおした。

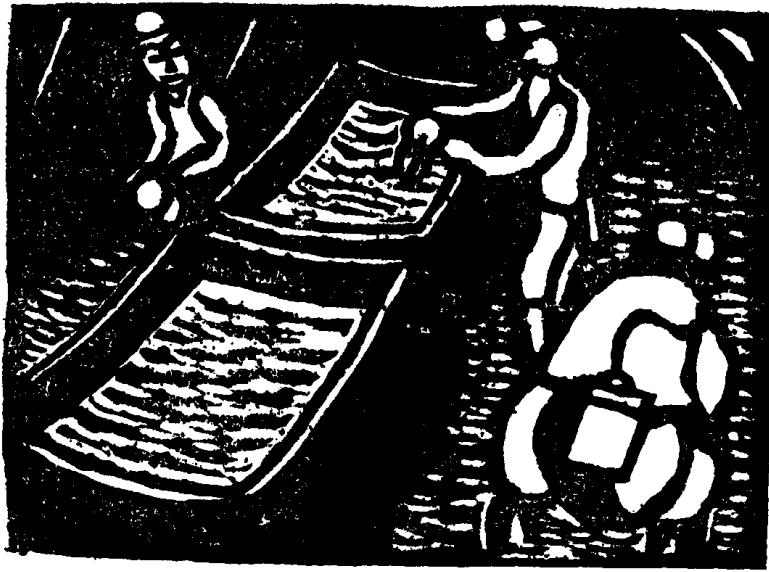


「おい、鈴木イー」遠くから係員のやつが、がんと風管をピッケルで叩いて、先山の源じいを呼んだ。あの学校出たてのわかい係員の野郎、親子ほども年のちがう源じいさえも呼びすてにしやがる。

「やれやれ、またひと文句くらわさるるか」源じいはずぶずぶ水をけて係員のほうにかけていった。

「用があつたらてめえが来ればいいんだ。俺たちを水のなかでこき使いやがつて、自分は地下たびの底がぬれるのもいやがりやがる」「俺どま命がけで働きよるとに、時間がくるが早い自分だけはさつさと上りやがるんだ。そのくせ俺どもがたまに早くおわれれば、まだ十五分早いとかなんとか文句をたれて、伝票ひんにぎつて寝てくさるとやけ」「人種がちがうつもりたい」「今にみちよれ、こてんこてんにやつつけてやるけ」「けんど、ヤンパンの野郎、一体なんの用事やろ?」「どうせろくなこたない」

みんなは手をやすめて、とぼとぼとひきかえして来る先山の姿をみながら話しあった。千次ひとり、あいもかわらず、ぶつすり黙りこくつて硬をさらえつづけた。



あんのじよう、ろくなことではなかった。「なんだと、仕事をやめて排水をしろだって?」「なに、社長が視察にくる? バカヤロー、人をなめるにも程度があらア」「今まで仕事にならんけん排水溝をほらせてくれとあれほど頼んでも、うてあわんやったくせに」「第一おまえ、なんぼ氣ばったところで朝まで溝がほるるもんか。捲立^{まきだて}まで五百メートルもあるとに」「なんち、炭車にくみこんで捨てろと?」「函の底にや穴があろうもん」「へえ、穴に栓をうちこむ? なーるへそ、ヤンバンともなりや、頭の使いみちのちがうたい」

が、すったもんだのあげく、係員の命令どおり排水することになった。「やれやれ、長生きをするもんじやなか。四十年も炭と硬はつんだばってが、炭車に水をつむとは始めてじゃわい」源じいはため息をついた。「これでヤンバンのやつめ先にあがつてみやがれ、ただじやすまさんど!」と五郎ちゃんはどなった。「くっそ」「くっそ」「くっそ」みんなとなりながら水くみをはじめた。千次は、いよいよにがりきった顔に泥水をはねあげながら、バケツで水をすくっては炭車のなかにくみこんだ。



やっと排水はおわった。とうとう弁当をくうひまもなかった。みんなぐったりしてひと息つこうとしているところに再び係員がやってきた。どうにか水がひいたとはいえ、坑道は水にとけて泥田のようにぬかりこむ。係員のやつめ「ごくろうさん」ひとつ言わないで、地下たびをよごさないように枕木（えんぎ）のうえをとび歩いて延先（のびさき）まで陰しい目つきで調べまわった。それからヘツピリ腰で天井を打診しながら「おい、鈴木」と横柄によんだ。「あぶないじゃないか。なぜもう一棹いれんか」「はあ、けんどもう一発破してからでないと、すぐふき倒されますけんで」「保安を無視することはできん！」係員は威ただかに「それから、おい、道のわるいところには石炭をしけ」「え、石炭を——道に?」「すべったりしたらケガのもとだ。それに能率にも差支えるからな。いいか、それだけきちんとやってからでないと昇坑させんぞ。もう一ぺん調べに来る」まっ白い手袋をはめた手で、ぴかぴか光ったピッケルをみがきながらみんなを睨（にら）みまわして、悠然と係員の野郎はひきあげていった。ふきだすガスの音がたかかった。